

槐

かい

岡井省二創刊

平成25年5月号

平成二十五年五月一日発行 第二十三巻第五号 通巻第 二六三号 (毎月一回一日発行)
平成三年九月十八日第三種郵便物認可



潮時

高橋将夫

永遠の命おそろし春の宵
ムンクの絵よりも歪んで石鹼玉
日陰とはありがたきもの残る雪
春愁がメールに添付されて来る

翻るときに燕の本音見ゆ

春の蝶夢とうつつを行ききせり

大根の花は一途な白さなり

うららかな末法の世に放射能

『俳句界』四月号「新作巻頭三句」より

春障子重低音の響きくる

花を待ち潮時を待ち迎へ待つ

春野から降りたがらぬ孫とゐる

槐安集

水野恒彦

詩は胸の高さにて詠むむつのはな花
冬薔薇恋といふ字は罪ですか
涅槃像海の青さのただならず
春昼の指もて何を数へむか
ガウデイの手描きの図面風光る

延広禎一

神の戸を開けて生いくた田ぞ鳥交る
凍瀧にやうやう鼓の連打かな
われもまた春の起居たちあや浅葱幕
立春の潮差して来し能衣裳
雛流し補陀落に向く日差しかな



加藤みき

春岬胸襟開き眼あけ
天地を蹴る春筍の鋒よ
幾筋も好しきいろ春の泥
にここにこと卒寿の顔や日脚伸ぶ
春浅しうすくれなぬの修行僧

石脇みはる

七人を招き入れたる冬座敷
上海と日本往き来す寄居虫こかな
佛間にも干して五色の霰餅
拾ひたる年の豆まだあたたかき
何事も潮時のあり山桜

中島陽華

雨村敏子

口角になじむ蜂蜜初日記

二ヶ月の鏡にうつる心かな

嘴の餌は八尾夕日の善知鳥かな

風花を鼻の頭で受けてをる

水分に辰砂ありけり春の闇

手風琴冬の干潟の広がれる

蘇鉄の葉風にそよぎて春立てり

大津絵の鬼の双眸蘂ゆる

てんしきや一枚肋に雪が降る

チンツアイをざぶざぶ洗ふ上巳かな

竹内悦子

本多俊子

冬蝶の春のいろして飛びにけり

白象のほそきまなじり涅槃の日

八十を越えし二人の恵方巻

黄蝶とつぶやく声の光りたり

立春の雨に濡れたるダンボール

はだれ雪にしき鯉紅深めたる

寒雷や臍のあたりが動きをる

この星に生きるあやしき春北斗

病院に煮物の匂ひ寒明くる

夜がそこに眉に触るるや春の月

近藤喜子

火の粉ふり払ひ燃え盛る山火
描かんと心の中を梅にせし
蛇穴を出でたる静寂うごきけり
冴返る岩に動かぬものの寂
黄沙降る空ねむさうでありにけり

谷村幸子

神宿す松に雪あり情けあり
どつと来し葡萄畑の寒雀
大樟の枝きる匂ひ寒諸子
寒月やロビーに吊す能衣裳
山門の蔵言うすれ冬うらら

瀬川公馨

点と線が痣をなしをる春隣
春光と天地ゆるがす楽隊と
菜の花やソネットなんぞ語じて
春宵のトウアレグの美美しき戦士
雪どけのぐるり蠟色ろういろを放ちけり
トウアレグは前巻の民

久保東海司

紙雛の折目正しく夜を見とる
暖かや木魚の口の軽く開き
不時着の紙飛行機が土筆野に
湯宿出て総身雪に恵まるる
存分な温泉と存分に降る雪を

中野京子

雪女の衣は風の流れなり
裸木の万朶雫発光す
鴛鴦の池時が静かに流れをり
捨てきつた後にふつから冬木の芽
ほのと生る匂が闇に春隣

柳川 晋

野火といふ幕の上りし楽土かな
春光を一匙掬ひ味噌を溶く
軽みとは舌を離れし春の色
信仰の無くて踏みたくなき踏絵
良薬はたしかに苦し水温む

岩下芳子

臘梅をまなこに入れて透きとほる
湖の底にこゑある蜩かな
円空仏の喉擦る春の風
春の日を旋毛二つで受けにけり
啓蟄の畦が動いてをりにけり

悼

同人 大島翠木さんが四月十五日ご
逝去されました。享年九十一歳でし
た。心よりご冥福をお祈りいたします。

槐の会

槐市集

鈴木初音

樹下瞑想平和の鳩に牡丹雪
大袈裟にはためいている春一番
四季桜空に散らして冴え返る
地割れたるクロッカス芽ぐむ験担ぎ
咲きはじむ合縁奇縁梅二月

十川たかし

御襖裸して赤ん坊なり雀の巢
臥して聞く乗込鮎の話など
細き枝に何の木の芽ぞ曇空
春浅き夢に出て飛ぶ白き鳥
十四日病院食にチョコレート

竹中一花

御所雛の屋根光りつつ夜に入る
打たれ来し鬼の会釈や冬果つる
春冷の部屋に子の書の空と海
指揮棒の一振り春を告げにけり
妙蓮寺椿咲きをる妙蓮寺

田中信行

その事は言はぬが花と福寿草
剪定を終へ人生を語りをり
錦絵の明治のガス灯暖かし
留萌線終着駅に積もる雪
留学の娘を思ひ雛飾る



槐集

高橋将夫選

見る人の色で瞬く冬銀河
枚方 熊川 暁子

百幹の影を跳びゆく雪うさぎ

臘梅のつぼみ現珀になりすます

親の積む積木くづして卒業す

下萌を踏んでいのちの柔らかし

春満月風に揺るがず統べるもの
岡崎 犬塚李里子

未来図に曲線は無し梅三分

寒明けの日を享け光り出す大地

現し世の過ぎ行く迅さ春の川

夜の精来て花の芽を揺らしをり

雛段に千の折鶴婿退院
京都 竹中 一花

優しさを半分貰ふ春菜和

節分の神火に灸る五體かな

小鳥屋の窓囀の飛び立てり

東山の色薄紅に春の月

先達の声のしてをり春霞
摂津 中田 禎子

何かいい匂ふくらむ春シヨール

鶯の声一品に朝餉かな

やはらかに心眼洗ふ春の雨

陽炎や即身仏となりにける

春はあけぼの御襖裸にゆまり仕る
高松 十川たかし

病む骨も父母のたまもの草の餅

ストレッチャーで渡る廊下の余寒かな

花束の花にまぎれて紙雛

手作りの雛見舞に聖者の日

春暁の無音の中に蘇生の気
枚方 近藤 紀子

薄氷の閉じ込めてゐるものあまた

唐梅の透きとほる黄をかさねつつ

母の湖の藻をまとひたる白魚かな

着ぶくれし座敷わらしのころころと

銀河往来 高橋将夫

◇「槐集」観照

見る人の色で瞬く冬 銀河 熊川 暁子
「暑人の色で瞬ぐ」の措辞がこの本質を見事に突いている。冬の銀河は、自分が見ているのと同じように、他人にも見えているという前提で世の中は動いている。しかしその保障はどこにもない。一切は各々の主観のなせる業なのだ。そんな理屈をコンパクトに言いとめた一句。

〈親の積む積木くづして卒業す〉の句は卒業の本質に迫っている。〈臘梅のつぼみ琥珀になります〉の句には詩情がある。〈下萌を踏んでいのちの柔らかし〉には生への憧憬がある。〈百幹の影を跳びゆく雪うさぎ〉はメルヘンの世界。季語の「雪うさぎ」はもちろん「雪で作った兎」だが、まるで北海道に生息する雪兎のようだ。飛び越えて行くのが影であるところにも作者の深い思いがあるのだろう。

未来図に曲線は無し梅三分 犬塚李里子
「未来図に曲線は無し」という発想に脱帽。例えば、人類の未来図が曲線の無い四角四面のものだとしたら、あまり歓迎できないが堅実で破綻はないかもしれない。

〈春満月風に揺るがず統べるもの〉、春の夜空を統率しているのは確かに風に揺れない春の月かもしれない。

小鳥屋の窓 囀の 飛び立てり 竹中 一花
小鳥屋の前を通ったら囀が聞こえてきた。「窓から囀が飛び

立てり」の措辞が素晴らしい。まるで小鳥が飛び立つように元気な囀が窓から飛び出してきのだ。

先達の声のしてをり春霞 中田 禎子
春霞の向こうに先達の声がしている。霞の向こうだから、もどかしい思いもあるが、霞はやがて晴れるもの。

病む骨も父母のたまもの草の餅 十川たかし
親から受けた身体髪膚。病んでいるとはいえ、この骨もまた父母からうけたもの。季語の「草の餅」がよく効いている。一日も早い快癒を祈りたい。

薄氷の閉じ込めてゐるものあまた 近藤 紀子
いろんなものを閉じ込めているのが厚い氷でなくて薄氷であるところがみそ。薄氷にもそんな力があつたのかと認識を改める一方、何かあやうさを感じないでもない。

白といふ魔力のありし雪の寺 江島 照美
一面雪に包まれた寺の景。その雪の白さに魔力を感じさせられたという。神秘的な雰囲気鳥肌がたちそう。他に〈寒月の中に一人の鬼女の住む〉〈鳳凰の頭に一羽寒鴉〉など。

初音していのちのしづくしたたらす 有松 洋子
鶯の初音に命の滴りを感じたという作者のやさしい心根に共感。他に、〈ままごとや黒き漆器に霞詰め〉など。(以下略)